

デービッド G. カービー著 『20世紀のフィンランド』(8)

David G. Kirby
Finland in the Twentieth Century (8)

坂 上 宏 訳

第5章 危機と復興1929年～1939年

両大戦間の時代一要約

実に多くのヨーロッパ諸国の中で、民主主義の灯が消えかけている頃、新しいフィンランド共和国において、強力な国会過半数に支えられた中道—左翼内閣が成立した^⑥。自由民主主義の諸原則の支持者たちは、この内閣の誕生を安堵して迎えた。かろうじてファシズムの脅威を免れたフィンランドが、あたかも復活と再出発のための途上にいるかのように思えたのであった。当時のある論者は、次のように述べている。

「1939年7月の国会選挙において、社民党と中道政党（農民連盟：訳者注）は、I.K.L.（愛国人民連盟）の議席の損失にともない、それぞれ議席を増やした。これにより社民党—農民連盟内閣に対して、国民の信任が示されたのである。I.K.L.は、それまで維持してきた議席のうち半分を失った。フィンランド国民は、1939年の夏の時点では、繁栄していたし、満ち足りており、そして団結していた。したがってもし困難な事態が生じるとするならば、それはフィンランド内部からのものではないであろう」^⑦。

しかしながら40年が経過して、俯瞰できる立場から眺めてみると、1930年代の形勢は、当時の人たちの目に映ったものよりも、いくらか平穏なものであったように見える。両大戦間期におけるフィンランドの政治システムについて、最も顕著な特徴は、おそらくその回復力（resilience）であっただろう。それは、立憲主義者の保守主義という深い土壌の中に根ざしたものであった。1918年のすぐ後の時期に、多くの東欧諸国において、民主主義のシステムが植えつけられた。しかしフィンランドの政治システムにはあった回復力という栄養物が、東欧にはあまりに不足していたため、その結果として東欧の民主主義システムは、じきに衰え、そして滅びてしまったのである。フィンランドの運命を導いた人々は、かつてのロシア専制政治の弾圧からフィンランドの立憲的な自由を守るための戦いのあいだに成熟していた。共産主義を粉碎する代償として、彼らがこうした自由を進んで放棄するだろうなどということは、全くありえないことだったのである。さらに1919年に成立したフィンランドの憲法が、強力な行政部を規定していたことは想起されるべきである。フィンランドの大統領は、単なる名前だけの元

首ではなかった。‘その手中には、強力な行政上の権限が集中する真の国家元首なのであった’⁶⁾。初代大統領のストールベリ (Kaarlo Juho Ståhlberg) は、論争を引き起こしたのだが、断固たる行動をとった。例えば彼は、国会過半数に及ぶ非社会主義勢力やカッリオ内閣 (Kyösti Kallio) の反抗に直面して、1924年に国会の解散を断行した。こうしたことで彼は、大統領職に対する敬意を徐々にかち取っていったのである。ストールベリの後継者たちは、おそらく彼と同じ才幹を持っていたわけではないだろう。しかしそれにもかかわらず彼らは、大統領という役職のおかげで、相当な権力を行使することができたのであった。強力な大統領制というものは、おそらくフィンランドにおける議会制民主主義の主要な保護手段であっただろう。ラトヴィア、エストニア、そしてリトアニアでは、行政上の権限は、党派争いに明け暮れている立法府の手中にあった。そして権威主義的な体制が、独立闘争の英雄たちによって創り出されていったのである。一方フィンランドの場合、権威主義的な保守派の英雄スヴィンヒューヴド (Pehr Evind Svinhufvud) は、保守的な憲法の枠組の範囲内でしか権力を行使することができなかったのである。

さらに言及されねばならないのは、フィンランド経済が好調であったことが、他の多くの東欧諸国における後進的な農業経済とは著しい対照をなしていたことである。本質的にこのことは、民主主義の現状を守る強力な方策であった。なぜならば経済成長は、その結果として必然的に明確な社会的、財政的利益をもたらすものであり、過激主義者の政治集団が唱えるような不平不満の温床を作り出すようなことは、まずありえないことだからである。フィンランドでは、

労使間の民主主義が著しく不十分なものであったことは真実である。特にこの点においてスウェーデンとは対照をなしており、1938年のサルトショーパーデン協定 (Saltsjöbaden agreement) は、労使関係において注目し得る画期的なものである。そうは言ってもフィンランドの労働組合は機能し続けていたし、カヤンデル内閣 (Aimo Kaarlo Cajander) は、若干の穏健な諸改革を導入したことはしたのであった (例えば年休など)⁷⁾。そうした改革は、社会における労働者の権利を当然のものとして承認することへ向かう一步を刻印したのである。組織的な労働組合運動のみならず労働者階級全体が、内戦で被った汚名に耐え忍んでいた。何人かの著述家が、‘第一フィンランド共和国’ (first Finnish republic, 1918-44) という言葉を使ったが、これは保守共和政を指すものであることは議論の余地がないであろう。この状況の中で社会主義者は、寛大に扱われたけれども、決して十分に融和したわけではなかったのである⁷⁾。

共産主義勢力の側でも、1918年の傷あとを癒すのに長い時間がかかった。フィンランド共産党やフィンランド国内の支持者たちは、保守ブルジョワ共和国の敵であると罵詈雑言を浴びせ掛けられた。そして保守勢力が実権を握ったフィンランドでは、社民党に対しても疑いの目で見られていたのである。赤衛隊の捕虜に恩赦を与える件のような感情的になりやすい多くの問題が、1918年に何が起きたか社会主義者たちに思い起こさせた。それは、100,000人の屈強な自警団員が行ったようなことである。特に自警団は、社会主義者をその構成員資格から除外していたのである⁸⁾。1918年の後のフィンランド社会民主党は、ある意味で状況の犠牲者であった。社民党は、反体制派 (あるいは保守側の見方では

裏切り者)の伝統を継承していた。それは完全に打ち消すことができなかった。社民党は、従来からブルジョワ国家の運営に参画することには気が進まなかったのだが、非社会主義政党が社民党に敵意を抱いていたため、そうした消極的姿勢は維持される傾向にあった。そうは言っても1920年代の社民党は、政治的威容を保持していたため、政権に参加する現実的な機会が確かにあったことはあったのだが。社民党にとってその役割を定めることは、たやすいことではなかった。しかし、1930年代に政治的ライバルであった共産党が事実上排除されたことによって、その課題は、確かにいくぶん容易なものになったのであった。社民党の党員数は、1919年は67,022人であったが、1925年にはおよそ25,000人に落ち込んでいた。そして1930年代の大半は、だいたいこれくらいの党員数にとどまったのである。都市部の党員の減少は、特に著しいものがあつた。さらにかつての小作農家の多くが、積極的な党活動から手を引きはじめていたけれども、社民党は、依然として地方労働者が大勢を占めていたのである。1930年以降の国政選挙で社民党は、党員数が下降しつつある時、あるいは党員数が最も落ち込んだ時であっても、ますます高い得票率を得ることができた。1939年選挙では、50万票以上を獲得したのである⁸⁾。こうした社民党の選挙における成功は、スカンディナヴィア諸国における社会民主主義政党の成長ぶりに匹敵するものであろう。しかしフィンランドの社民党を‘スカンディナヴィア’の政党と呼ぶことは適當ではないだろう。1930年代初期にフィンランド社民党は、まさにその存在が脅かされた。そして社民党は、さらに悪い選択肢を恐れるあまり、4年間は国会少数派のブルジョワ内閣を支持せざるを得ないと感じる

ようになったのである⁹⁾。社民党は、カヤンデル‘赤一土’内閣の時でさえも、連立の一員としては見習い中の新参者のようなものであつた。ある論者は、最近次のことに注目している。それは、1930年代のフィンランド社会民主主義が、右翼社会に適応しようとする傾向があつたこと、そうすることで社会民主主義のイデオロギーを混乱させてしまったということである⁸⁾。フィンランド社民党は、スウェーデンやデンマークの社民党のような急進的な改革政党として政治的な主導権を握つたのではなくて、保守派のオーケストラの中で、大半の時間を第二ヴァイオリンを演奏することに甘んじたのであつた。

フィンランド社民党は、厳密には‘スカンディナヴィア’の政党であると言ふことはできないだろう。なぜならばほかのあらゆることは別にしても、フィンランド政治システムと政治状況は、西側の隣国とは全く異なっていたからである。スカンディナヴィア諸国では、共産主義がその政治体制に深刻な問題を突きつけたことはなかつた。また内戦や戦後の混乱を経験したこともなかつたし、潜在的な敵国と長い国境を共有してもいなかつた。フィンランド社民党にとって強い関心の的であつた政治的問題の多くが、スウェーデンやデンマークでは存在しないものであつたか、あるいは第二義的なものにすぎなかつたのである。スカンディナヴィア諸国で騒動を引き起こしたある重要な政治的問題が、フィンランドでも存在していた。しかしその問題は、フィンランド社民党にとってあまり関心のない事柄であつたのである。それは言語問題⁹⁾であつた。例えばタンネルは、この問題を‘六番目の問題だ’と無理矢理切つて捨てたのである。

言語問題に関する論争の中心は、ヘルシンキ大学であつた。単一言語に基づく新しい高等教

育機関が、民間主導でいくつか創設されたけれども、その受け入れた学生の数はわずかであった。学生の大半が、依然としてヘルシンキを進学先を選んだ。そしてその教育は、フィンランド語とスウェーデン語で行われていたのであった。このことは次のことを意味する。すなわちフィンランド語圏の辺境の地から出て来た若者が、不意に彼にとっては学校で習っただけにすぎない外国の言葉で授業を受けざるをえないことに気がついたかもしれないということである。当然のごとくこのことは、学生たちを憤慨させた。そして彼らは、望ましい就職口を見つけることがなかなか困難であったため、そうした感情をますますつのらせたのであった。学生の就職問題は、卒業生の数に従って大きくなっていったのである。フィンランド人系学生は、教職や聖職そして公務員の仕事を好む傾向があった。これらの職業すべてにおいて、栄達を成し遂げることは往々にして困難であったし、特に公務員の場合、すでに実質的な収入力の大幅な低下に耐え忍んでいたものであった。スウェーデン人系フィンランド人は、商業や工業により多くの関心を示していた。こうした産業分野では、スウェーデン人系エスタブリッシュメントは、依然として強固なゆるぎない立場にあったのである。ハマライネン (P.-K. Hamalainen) は、1930年代初期に大学の卒業生6人のうちで、卒業してただちに職にありつけた者は4人に過ぎなかったと算定している。一方でそうした人たちの多くが就いた仕事は、賃金が良いものではなかった。したがって彼らは、学業のために借りていた金を返済することができなかったのである。彼らは、見知らぬ大都会で、貧困や不安感そして孤独感に苛まれていた。こうしたことすべてが、「学徒カレリア協会」(A.K.S.)へ

フィンランド人系学生が吸引されていくのを助長したのである^⑧。1924年以来この団体は、ヘルシンキ大学におけるフィンランド語使用を徹底させる運動を行っていた。こうした学生よりも旧世代のフィンランド民族主義者は、A.K.S.の過激で時に偏狭な要求に不安を抱いていた。そしてヘルシンキ大学の現状を維持しようとしていたのであった。1923年に成立した大学教育に関わる法律は、フィンランド語使用の徹底化を要求する人々にとって不満足なものであった^⑨。すでに1920年代末までに三つの非社会主義フィンランド語政党が、言語問題に関して極めて顕著に非妥協的な政策を採択していた^⑩。なかでも農民連盟が、おそらく最も極端な態度であっただろう。1932年になると農民連盟は、単一言語国家を実現すべしという要求をあからさまに主張するようになった。農民連盟は、1933年から1935年にかけてヘルシンキ大学のフィンランド語化を徹底させようとしたのだが、ところがこれは実現できなかった。この後1937年に農民連盟は、スウェーデン人系の教授の数を15人に制限する法律制定に関わったのである^⑪。国会において延々と退屈な討論が行われているあいだに、フィンランド民族主義者の学生は、デモやストライキを行い、抗議集会を開いた。この他には、スウェーデン語の道路標識をペンキで塗りつぶしたり、スウェーデン人系の教員に対してやじを飛ばしたり、授業をボイコットした。またこうした学生たちは、旧世代の人たちから見れば、一般的に言って自暴自棄と受けとられるようなこともした。このような数々の行為によってフィンランド民族主義者の学生たちは、その心情を表に出したのである。

言語闘争は、国民的な統合に関する二つの異なった概念の衝突として見ることができよう。

すなわち中心と周辺の対立として、あるいは世代間の対立という見地から考えることができるのである。しかし言語闘争の根底にある原因は、社会的なものであった。もともとフィンランド社会内部には、体制側の圧倒的力を持ったスウェーデン人系エリートに対する野心的なフィンランド人系知識人階級の反発、ということから生み出された社会——経済的緊張が存在していた。しかしこうした緊張は、かつてのロシアの圧政に対する戦いのために、おおい隠されてしまっていたのである。ところがこうした緊張は、フィンランドがロシアから独立を勝ち取ったことに伴い、その激しさをさらに増していったのである。フィンランド社会におけるこのような緊張は、19世紀においては知識人階級内部の狭い範囲に限定された対立にすぎなかった。しかし公共サービスの拡大や近代的な政党の出現に伴い、いまやこのフィンランド人系とスウェーデン人系のあいだの緊張は、もっと広範な様相を帯びるようになったのである。何よりも戦間期の言語闘争は、都市のフィンランド人系中産階級の成長によって引き起こされたものであった。そして政治家や知識人が、この事実を認めることに消極的であったために、この対立は悪化していったのである。

極めて現実的な意味においてこの問題は、言語にかかわるものではなくて、社会的立場にかかわるものであった。フィンランドが独立する以前は、公的社会を全く完全に独占していたのが知識人階級 (*sivistyneistö*) であった。しかしいまや知識人階級は、身を切るような経済的、社会的変化の厳しい風を感じはじめるようになったのである。1941年に出されたある委員会報告は、次のように述べている。‘かつてわれわれの崇拜の的であった知識人階級は、まさに公的

社会を独占していた。いまや資本家たちが、その威容で公的社会を席卷しているのである。’⁹⁾ 地位や身分などの古い社会の秩序は、19世紀末に資本主義と工業化の影響が生じる以前に、すでに崩れはじめていた。とは言ってもこの古い秩序は、1906年までその政治的形態を維持していた。国会改革をもってしても、統治者に対する忠誠と奉仕を強調した支配や行政の保守的構造を破壊できなかったのである¹⁰⁾。フィンランドが独立して最初の時期に、この古い構造の主要人物は排除された。この新たに生まれた共和国は、ますます競争が激しくなる世界の中で、政治や経済の苛酷な現実と折り合わなければならなかったのである。しかしフィンランド国民の多くが、そうした現実に適応できたわけではない。それゆえ有機的かつ伝統主義者から成る共同体という理想像を提示した熱烈な民族主義のアピールが、血縁や実直な農夫の価値観と結びついたのであった。高級官僚、聖職者、学生、そして知識人が、過激な民族主義者集団の中軸を形成したというのは必然性がある。なぜならば自分の社会的立場を最もひどく喪失したと感じたのは、こうした社会分子であったからである。官僚組織は、農民連盟の反都市・反官僚主義的分子からたびたび非難を受けた。保守派の人々は、官僚組織が‘プロレタリアート化’していると指摘していた。彼らをして、そのように語らせたのは、公務員の実質収入の低下とともに、下級官僚の増加ということがあったのである。

既述した通り、大学卒業の資格を持った学生の多くが、自分に向いていると感じるレベルの職を得るのが難しいことに気づいていた。大学は、もはや社会的地位が高い職業に対する門戸を開けることができなくなったのである。商業

教育あるいは技術教育のほうが、報酬の良い仕事にもっと容易にありつけそうであった。しかしフィンランド人系の学生は、スウェーデン人系の学生よりもそうした進路に進みたがらなかったのである。教会は、伝統的にフィンランド人系学生の主要な雇い主であった。しかし教会は、伝統的な社会的・政治的価値観の崩壊に伴い、その権威をはなはだしく失墜させてしまっていた。その上1905年と1917年から1918年にかけての出来事が、'国民' (people) というロマンティックな民族主義者の幻想をこなごなに打ち砕いてしまったのである⁹⁾。とはいえ内戦が、祖国のために東方の敵に対して戦う頑健で実直な農夫、というフィンランド人の新しい神話を確かに作り出したのだけれども。この神話は、ラプア運動のおかげで寿命がさらに延びた。それにもかかわらず民族主義者である右翼の知識人階級は、農民との永続的なきずなを作り出すことには失敗したのであった。数エーカーの森林を所有するにすぎない典型的な小農が、市場経済の構成要素になった。そしてこうした小農が抱える問題は、所有する土地がわずかしかないというまさにこの事実起因するものだったのである。結局のところ民族主義者の理想主義が小農に対して提供した値打ちのあるものは、わずかにしかすぎなかったのである。

ユルヨ・ルートゥ (Yrjö Ruutu) は、1920年代における国家社会主義の先駆的な主唱者であった。彼は社会改革を進めるにあたって、教育を受けた中産階級がその先頭に立つべきだと呼びかけた際に、フィンランドの基本的問題を明らかにした。それはすなわちフィンランドには、強力な中産階級が欠けているということである。より正確に言えば、自分自身をそうした中産階級の人間だと進んで認める社会集団が欠

けているということである。フィンランドには、歴史的に上流社会の痕跡が非常に根強く残っていた¹⁰⁾。産業界の有力者や実業家たちは、そうした社会の外辺の上にとどまっていた。そして彼らは、戦間期のフィンランドの社会的・政治的枠組みの中にたやすく組み込まれはしなかったのである。政府や行政機関は、依然として学歴の高いエリートによって非常に強く支配されていた。このことは、戦間期の内閣で閣僚を務めた人たちの職業上の経歴を一瞥すれば確認できるであろう。ホワイトカラー (businessman) あるいはブルーカラー (industrialist) が、内閣の一員として働くなどということは、稀な現象であった。かつて経験したことがなかったほど経済が発展した時期に、国家の諸問題が政治家によって治められるべきであるなどと考えることは、おそらく不合理なことであろう。なぜならばそうした政治家の多くが、まだ階級社会にうまく同調することができていなかったからであり、そして彼らは、ゲゼルシャフト (Gesellschaft) の世界の中で、ゲマインシャフト (Gemeinschaft) をあこがれていたからであった¹¹⁾。

文学よりほかに、フィンランド民族主義の理想や憧憬が綿密に反映されたものは、ほかのどこにもなかった。その時々々の社会秩序に批判的な作家は、自分の著作を出版するための出版社を見つけることが困難であった。フィンランドでは、外国の現代文学の翻訳ものは不足していた。ロマン・ロラン (Romain Rolland)、ジョン・スタインベック (John Steinbeck)、そしてイヴァール・ロ・ヨハンソン (Ivar Lo-Johansson) といった外国の多くの作家は、フィンランドの読書界ではほとんど知られていなかった。なぜならば彼らの作品は、翻訳には不向き

であると見なされていたからである。エルッキ・ヴァラ (Erkki Vala) は、彼が発行する雑誌『トゥレンカンタヤト』(*Tulenkantajat*) に、「グッドソルジャー シュベイク」(*The Good Soldier Švejk*) の翻訳抜粋を掲載したかどで投獄された^⑧。右翼や教会が反対したため、「緑の墓地」(*God's Green Acres*) のヘルシンキにおける上演は中止された。フィンランド文学が、内省的で外国嫌いの傾向すらあることについては、1935年のフィンランド作家協会による声明の中で、次のように簡潔に述べられている。‘われわれは、唐檜(トウヒ spruce)の下で暮らしている。だから唐檜のささやきに耳を傾けなければならない。外国で流行している多くの妖しげな女たちの歌など聞いてはいけない。われわれは、そのような外国の歌の拍子に合わせていとも浮薄に、そして不恰好に踊っているのだ。われわれは、われわれ固有のカレヴァラ精神の持つ気高き深遠さに導かれて、必ずや勝利に到達するであろう’¹²⁾。

‘カレヴァラ精神’ (Kalevalan spirit) というものは、フィンランド民族主義の伝道者、歴史家、詩人、そして評論家にとって一様に、確かにインスピレーションが湧き出るこの上なく貴重で、無尽蔵な泉であった。しかしこの泉は、偉大な文学の源泉というほどではなかったかもしれない。ノーベル賞受賞者シランパー (Frans Eemil Sillanpää)^⑨ などのわずかな例外を除いて、フィンランドの作家は自分たちの祖国の外では、実際には知られていなかった。音楽の分野では、すでに独立以前にシベリウス (Jean Sibelius) が、ヨーロッパで名声を獲得していた。しかし彼の名声が大きかったため、若い世代のフィンランド人作曲家の影が薄くなる傾向にあった。フィンランドが本当に国際的

に認められたのは、建築とスポーツなど大衆文化のレベルだけであった。たとえありきたりで平均的な人間 (the man on the Clapham omnibus) であっても、シベリウスやアルヴァル・アールト (Alvar Aalto) については聞いたことがなかった。そうした人たちが知っているのは、パーヴォ・ヌルミ (Paavo Nurmi) であったのである^⑩。

あまり知られていなかったのは、スポーツが、フィンランド人の生活における他の非常に多くの領域と同様に、階級の境界に沿って組織されたことである。1932年に「労働者スポーツ連盟」(Työväen Urheiluliitto, T.U.L, 1919年創立) は、非社会主義者の連盟 S.V.U.L (「フィンランド体育・スポーツ連盟」, Suomen Voimistelu- ja Urheiluliitto, 1900年創立) との提携構想を拒絶した。そのため T.U.L は、国の補助金が止められたのであった。時折、競技用のユニフォームを着用した T.U.L の選手が、政治的な服装の禁止という法規定に従わなかったという理由で告発された^⑪。また彼らは、ライバルの S.V.U.L には認められていた施設の利用をたびたび断られたのであった。

消費者共同組合運動も同様に、‘中立的な’ S.O.K (「フィンランド消費者協同組合中央団体」 Suomen Osuuskauppojen Keskuskunta, 1904年創立) と ‘進歩的な’ O.T.K (「消費者卸売協同組合」 Osuustukkukauppa, 1917年創立) に分裂した^⑫。O.T.K で指導的役割を演じたのが、ヴァイノ・タンネルであった。これら2つの団体の活動が成し遂げたものは、政治的に対抗し合うものであったというよりは、はるかにずっと長続きするものであった。そしてその成果は、海外で広く賞賛されたのである。消費者協同組合は、まさに後進的な地方経済と近代的

な消費者社会のあいだの橋渡しをただけでなく、教育においても極めて重要な役割を演じたのである。消費者協同組合が、その店舗において、安価で良質な消費物資を広範囲に提供したことは、おそらく多くを語る必要はないだろう。そして簿記、家政、畜産業のような世俗的ではあるが、日常的な現代生活に必要な仕事に対応するため、消費者協同組合が一般のフィンランド人への教育を支援したことも同様であろう。つまり組合運動は、全体的に国民統合の仲介者として、不可欠な役目を果たしたのである。

生活水準の問題は、論争的なものの一つである。しかしあらゆる証拠が明白に示していることは、平均的なフィンランド人男女群の1930年における暮らしぶりは、20年前よりもかなり向上したということである。平均寿命は長くなっていった。そして幼児の死亡率は減少していった。1940年におけるフィンランドの平均的家庭の状況を見ると、以前よりも食料品に対する支出の割合は少なくなっていた。それにつれて衣服、娯楽、そして余暇活動への支出を増やす余裕が出てきたのであった。つまり1940年における平均的家庭は、独立以前の時期の平均的家庭の規模よりも、小型になったのである。戦間期において、標準的な生産年齢集団である15才から64才までの年齢のフィンランド人の割合は、高い水準を維持しており、1920年には62.3%であったが、1940年には67.2%に上昇した。1920年から1940年にかけての工業労働力は2倍に増えており、そして都市の人口はほんの50万人強から100万人近くまで増加した。しかしながら国民の大部分は、依然として地方に居住しており、そこで生計を得ていた。1930年の国内総生産における農業の割合は、スウェーデンが13%に対して、フィンランドは47%であった。戦間

期のフィンランドの場合、国内総生産を一人当たりで見ると、他の北欧諸国よりもずいぶんと急速に成長したけれども、そのようにして生み出されたフィンランドの国家的資産は、かなり低い水準にあった。スウェーデンと比較すると、フィンランドは相対的に言って発展しておらず、その経済は農業が優位に立っていた。しかしながら大部分の東欧諸国と比較すると、フィンランドは工業化の道をはるかに先へ進んでおり、堅実な農業とより高い生活水準を備えていたのであった。

1920年代の土地改革は、小作農家の割合を劇的に減少させた。他方でこの改革は、不況のあいだにひどく困窮した小農階級の恒久化を助長したのであった⁸⁾。専門技術や土地の肥沃化、そして耕作に関しての著しい進歩が、穀物の生産の大幅な増加に寄与した。小麦は、1920年以前の生産量はほとんどなかったのであるが、1930年代になるとよく作付けされる作物になった。第2次世界大戦直前のフィンランドは、実質的に食用穀物を自給自足しており、これは1914年の状況とは好ましい対照をなしていたのである。牛乳の生産も大幅に増加した。これは飼育方法の改善とともに、飼料や牧草を今までより多く与えることができるようになったおかげであった—— ヴィルタネン (Virtanen) 方式と呼ばれる牧草生産が、1930年代に広範に用いられるようになった——。そしてフィンランドの乳製品は、海外で販売されるようになった。馬を動力とする機械は、ますます普及していった。もっともトラクターはごくまれにしかなく、東部や北部フィンランドの広大な地域では、電力など通っていなかったのである。

戦間期を通してフィンランドの木材加工産業は、他のすべての製造部門に対して優位であり

続けた。1939年までに製紙・パルプ産業の生産高は、木材産業のそれを越えた。また1930年代末までにパルプや紙製品は、フィンランドの対外貿易収益の半分近くを占めるようになった。したがって製材輸出と合わせると、これらの製品は、フィンランドの輸出総額の4分の3以上を占めたのである。金属産業や鋳業も発展した。これは、少なからず国内需要が増大したためであった。1930年代におけるフィンランドの主要な貿易相手は、英国であった。英国は、さらにドイツに代わって、フィンランド向け商品の主要輸出国にもなったのである⁹⁾。

急激な経済拡大にもかかわらず、フィンランドの産業は構造的な硬直化に苦しんでいた。政府が融資の形態で農業を支援したり、新たな農地を開拓したりしたけれども、そうした状態はほとんど緩和されなかったのである。北欧の経済発展に関する最近の調査が適切に結論づけている通り、'フィンランドを真の意味で工業国と呼ぶことができるようになったのは、戦後の時期（第2次世界大戦後）になってからであった'¹³⁾。

フィンランドの輸出産業の成長、消費者需要の増大、そして交通通信手段の向上などこれらすべてのことが、フィンランドの外部世界との接触をより緊密なものにした。とは言っても多くの局面においてフィンランドは、19世紀にそうであったように、世界の様々な出来事や発展から孤立したままであった。フィンランド語に翻訳された現代文学が、わずかしかなかったことはすでに言及した。世界で何が起きているか理解を得るために、フィンランドの知識人(reader)が主として依拠しなければならなかったのは、機関報道と吹き替えされたニュース映画であった。有能なニュース解説者は少しかい

なかったし、現場に出向いて取材したり、掘り下げて調査するジャーナリズムの伝統もなかった。ソヴィエトロシアの教養社会で何が起きているのかということについて書き記されたこと、あるいは語り伝えられたことはわずかでしかなかった。すなわち当時のフィンランド人にとって、東側の隣国は、外モンゴル(Outer Mongolia)とほとんど同じくらい隔絶していたのである。フィンランド人の親ドイツ的で保守的な感情というものが、この当時のドイツに関するイメージから、ナチ体制という不快な側面を省いてしまう傾向が確かにあった。フィンランドの外交団は、不十分な予算しか与えられておらず、そして非常に未熟であった。さらに彼らは、本国の政府に対して均衡のとれた世界像を提示できるなどとはまったく思いもよらなかったのである。1920年代における多くの主要な外交官が、その地位に就くことができたのは、戦時における政治的活動のおかげであった。在外勤務をしながら、そうした活動を遂行し続けた者も少なくなかったのである。その信用性を確立しようとやっきになっている小さな新生独立国家にとって、自己の存在について過度に気にかかるというのは恐らく不可避なことであろう。フィンランドの場合が、確かにそうであったのである。戦間期にマスコミで行われた討論や文学上の論争を一瞥すると、フィンランド国民の性格のうちで、内省的で強迫観念に取り憑かれた側面というものがすぐに明らかになるであろう。それは、当時の世界におけるフィンランドの立場に関して、かたくなな意見の多くを固定化させたのである。つまりフィンランドの立場というものが、西欧の価値観の前線部隊であるという思い込みとなって固定化されたのである。

1930年代という‘陰鬱で不誠実な10年’が終わりに近づくにつれて、フィンランド国内政治の新たな一章が、まさに始まろうとしていたかに見えたかもしれない。この新しい国内政治では、社民党が加わって強力な政権が形成された。この政権には、その後名声を得ることになるウルホ・ケッコネン (Urho Kaleva Kekkonen) やカール＝アウグスト・ファーゲルホルム (Karl-August Fagerholm) のような新進気鋭の政治家も閣僚として加わっていたのであった⁵⁾。過去の1917年～1918年の英雄は、御影石の像となって、現在国会議事堂のまわりを立ち続けている。彼らは、その役割を十分に果たしたように思える。スヴィンヒューヴドは、1937年の大統領選挙で敗北を喫した後、故郷の邸宅に身を引いた。またストールベリは、国家における自由主義のある種の良心として、舞台裏にとどまった。ソ連では、共産党に鞍替えしていたフィンランド社民党のかつての指導者の大部分が、スターリンによる粛清によって、大鎌で刈り取られてしまった。しかしクーシネン (Otto Ville Kuusinen) が例外であったのは、注目に値することであった⁶⁾。

1918年の時の大物二人が、1930年代になって公的生活に復帰した。それは、国民連合党党首のパーシキヴィ (Juho Kusti Paasikivi) と国防評議会議長のマンネルヘイムであった。この職は、彼のために特別に設けられたのである。旧ロシア帝国陸軍の将軍とかつての老フィン人党の議員が、国家の命運を左右する状況の中で、依然として重大な役割を演じなければならなかったことを予想できた者は、ほとんどいなかったであろう。

訳者注：本章は2部構成になっており、今回は

その後編を訳出した。前編「青－黒から‘赤－土’へ」については、デービッド G. カービー著、坂上宏訳「20世紀のフィンランド」(7)、『九州情報大学研究論集』第8巻、第1号、2006年3月、99－120ページを参照ありたい。

原 注

5) Ibid., p.185. 1939年選挙結果は次の通り (括弧内は1936年選挙との増減)。

IKL	8 (-6)
国民連合党	25 (+5)
スウェーデン人民党	18 (-3)
国民進歩党	6 (-1)
農民連盟	56 (+3)
社民党	85 (+2)
その他	2

6) J.Nousiainen, *The Finnish political system*, Cambridge, Mass. 1971, p.227. 英語による非常に詳しく明瞭な説明。

7) この用語は、作家マッティ・クルイエンサーリ (Matti Kurjensaari) が、彼の著書『明日への戦い』 (*Taistelu huomispäivästä*) Helsinki 1948, p.204の中で最初に使ったように思える。もっと最近になるとこの用語は、大学の教科書では、政治的な区分を表すものとしてではないにしても、年代を区分する用語として使用されるようになった。V.Rasila, E. Jutikkala, K.Kulha (eds.), *Suomen poliittinen historia 1809-1975* (『フィンランド政治史 1809-1975』), Vol.2 (1905-1975), Porvoo-Helsinki 1977.この著作は、フィンランドのメディアでかなりの論争を引き起こした。

- 8) L.Haataja, S.Hentilä, J.Kalela, J.Turtola (eds.), *Suomen työväenliikkeen historia* (『フィンランド労働運動史』), Helsinki-Joensuu 1977, p.221.
- 9) R.Alapuro, *Akateeminen Karjara-Seura* (『学徒カレリア協会』), Porvoo-Helsinki 1973, p.52における引用。
- 10) ルートゥが、彼の著作『新しい方向』(*Uusi suunta*, 1920)の中で、*keskisäätty* (middle classあるいはmiddle estate: 訳者注)という用語を、ドイツ語の *Mittelstand* の最も適した訳語として使用していることは興味深い。先駆的なフィンランドの社会学者ヴァリス (H.Waris) は、その著書『変化するフィンランド人社会』(*Muuttuva suomalaisen yhteiskunta*, Porvoo-Helsinki 1968)の中で、上流社会が持っていた貴族的姿勢は、今日のフィンランド社会でも依然として生きていると述べている (41ページ)。さらに U.Rauhala, *Suomalaisen yhteiskunnan kerrostuneisuus* (『フィンランド人社会の階層性』), Helsinki 1966も見よ。
- 11) しかしながら次のことは、確かに珍しいことではない。それは、政治家というものが、自分が大人になるまで育った世界によって陶冶されるのであって、自分が今暮らしている社会によってではないということである。1920年代におけるすべての主要な西欧諸国の政府が、自由放任主義に忠実であったことが、その優れた例証である。アラプロの前掲書は、フィンランド社会とテンニース (Ferdinand Tönnies) のゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念の関連について研究している。
- 12) P.Hemanus, *Reporadionnousu ja tuho*, Helsinki 1972, p.34.における引用。‘カレヴァ

ラ精神’とは、フィンランドの民俗的叙事詩『カレヴァラ』(*Kalevala*)によって得られたインスピレーションを示すものである。

- 13) L.Jörberg, O.Krantz, ‘Scandinavia 1914-1970’ in C.Cipolla (ed.), *The Fontana Economic History of Europe*, vol.6, pt.2, London 1976, p.386.

訳者注

- ⑤⑤ ここで言及されている「中道—左翼内閣」とは、第三次カヤンデル連立内閣 (1937年3月12日~1937年12月1日)を指す。与党は、進歩党、社民党、農民連盟、スウェーデン人民党の四党で、国会では計164議席の安定多数を保持していた (フィンランド国会は一院制で議席数は200)。
- ⑤⑥ 1919年に成立したフィンランド憲法によれば、大統領には、閣僚の任命、政策決定、外交、戦争指揮など広い分野にわたって強大な権限が付与されていた。詳細は、拙稿「1982年フィンランド大統領選挙」(1)、『九州情報大学研究論集』第1巻第1号、1999年2月を参照ありたい。
- ⑤⑦ デービッド G.カービー著、坂上宏訳「20世紀のフィンランド」(7)、『九州情報大学研究論集』第8巻第1号、2006年、訳者注④⑨、119ページを参照のこと。
- ⑤⑧ 本文の「1918年に何が起きたか社会主義者たちに思い起こさせた。それは、100,000人の屈強な自警団員が行ったようなことである」という文章が、具体的に何を指すのかは明らかではない。例えば1918年の内戦が終わって自警団が、治安維持に携わるとともに、内戦で敗れた赤衛隊兵士の捜索を行うなど、左翼勢力に対する圧力を強めていったことなどを意味しているのであろうか。ただ少なくとも自警団が、設立時から反ソ連・反共産主義の性格が強い団体であっ

たことは強調されるべきであろう。Huttunen, *op.cit.*, ss.340-342. 自警団については、デービッド G.カービー著、坂上宏訳「20世紀のフィンランド」(5)、『九州情報大学研究論集』第6巻第1号、2004年、訳者注⑤、172-173ページを参照ありたい。

- ⑤⑨ 1910年代から1930年代にかけての国会選挙の結果については、同前拙訳、訳者注を見よ。
- ⑥⑩ 1920年代後半から1930年代前半にかけて国内を席卷した極右主義者は、共産主義のみならず自由主義や社会民主主義も攻撃の対象にしていた。社民党にとっては、極右主義者によるファシズム内閣が誕生し、風当たりがさらに強くなるよりは、穏健な中道保守内閣と協調の道をとるほうが安全な選択肢であった。同前拙訳、訳者注⑥、181-183ページ。
- ⑥⑪ 言語問題については、同前拙訳、訳者注⑨～⑫、166-168ページも参照ありたい。
- ⑥⑫ 学徒カレリア協会 (A.K.S.) については、同前拙訳、訳者注⑧～⑬、166-168ページも参照ありたい。
- ⑥⑬ この法律は、大学におけるフィンランド人系教員とスウェーデン人系教員の数を原則的に決定することを主な内容としていた。しかし1925年になると、スウェーデン語による教育に反対する学生たちは、二言語制からフィンランド語のみの一言語制に変更すべしという要求を提出したのであった。Huttunen, *op.cit.*, ss.518-519.
- ⑥⑭ 「三つの非社会主義フィンランド語政党」とは、農民連盟に加えて国民連合党、愛国人民運動 (I.K.L.) を指すものと思われる。
- ⑥⑮ この法律に関する事情は、デービッド G.カービー著、坂上宏訳「20世紀のフィンランド」(6)、『九州情報大学研究論集』第7巻第1号、2005年、訳者注⑧、92-93ページを参照ありたい。
- ⑥⑯ 「国会改革」とは、1906年7月20日にロシア皇帝が承認したものを指しているのであろう。その主な内容は、それまでの身分制国会を普通選

挙に基づく一院制国会に変更しようとするものであった。しかしながらこの改革後も、ロシア皇帝の手中には国会を召集、停止、解散する権限が残されたままであり、その意味においてこの改革は、フィンランド側にとって不十分なものであった。デービッド G.カービー著、坂上宏訳「20世紀のフィンランド」(2)、『九州情報大学研究論集』第3巻第1号、2001年、130ページ。

- ⑥⑰ 1905年にフィンランドの立憲主義者や労働運動が、国会の緊急招集などをロシア皇帝に要求して、ゼネストを実施した。しかしフィンランド国内の保守と左翼が対立し、また、ロシア側がストに対して強硬な姿勢で臨むようになると、ストは中止された。同前拙訳、128-130ページ。

1917年になると、ロシアの革命情勢を背景にして、フィンランド国内でも左右のイデオロギーの相違に基づく対立が大きくなった。そして1918年になってこの対立は、内戦という形で最も激化するに至ったのである。

ともあれ独立前後の時期のフィンランドは、以上のような保守と左翼の対立を国内に抱えていたのであり、その意味においてフィンランド人を団結した‘国民’とみなすには、まだいらか時間が必要であったのである。

- ⑥⑱ イヴァール・ロ・ヨハンソンは、スウェーデンの左翼的な作家で、農民の生活などをテーマにした。

フットゥネンによれば、『トゥレンカントヤト』誌は1932年から1939年にかけて刊行されており、左翼急進的な文芸誌と見られていた。Huttunen, *op.cit.*, ss.484-485.

「グッドソルジャー シュベイク」は、チェコ人の作家ヤロスラフ・ハシエク (Jaroslav Hašek) による小説で、彼の死去のため、作品は未完であった。

- ⑥⑲ シッランパー (1888年～1964年) は、フィンランドの小説家で、1939年にノーベル文学賞を

受賞した。

- ⑦⑩ シベリウス (1865年～1957年) はフィンランドの作曲家。アルヴァル・アールト (1898年～1976年) はフィンランドの建築家・家具デザイナー。パーヴォ・ヌルミ (1897年～1973年) はフィンランドの陸上選手。オリンピックで金メダル9個を獲得した。
- ⑦⑪ キヴィマキ内閣 (1932年～1936年) は、極右対策として、政治的な扇動を行ったり、特定の政治団体との関連を思わせるような服装を着用することを禁止した。前掲拙訳「20世紀のフィンランド」(7)、111ページ。
- ⑦⑫ フィンランドにおける協同組合の結成事情については、前掲拙訳「20世紀のフィンランド」(6)、訳者注⑨⑨、100-101ページを参照ありたい。
- ⑦⑬ 土地改革については、同前拙訳、80-81ページおよび訳者注⑦②、90ページを参照ありたい。
- ⑦⑭ 戦間期のフィンランドにおける木材産業と製紙・パルプ産業、そして対外貿易の状況については、同前拙訳、83-84ページを参照ありたい。
- ⑦⑮ この政権は、第三次カヤンデル内閣 (上記⑥⑤参照) のことを指しているものと思われる。
- ⑦⑯ 1930年代を中心に吹き荒れたスターリンによる大粛清では、ソ連に亡命していたフィンランド人革命勢力も、「革命の敵」として処刑あるいは強制収容所送りの対象となった。アプトン (Anthony F. Upton) によれば、約2万人のフィンランド人が強制収容所送りとなったが、その大半が死亡したという。なかでもソ連によって設立された「カレリア労働者自治共和国」の指導者ギュリング (Edvard Gylling)、ロヴィオ (Kustaa Rovio) やラウティオ (Wiljam Rautio) などのフィンランド人革命勢力指導者が、1938年に銃殺刑に処された。また、かつてフィンランド国会の議長を務めたマンネル (Kullervo Manner) も同様の最後を遂げたという。結局粛清を免れたフィンランド人の重要人物は、クーシネンだけであった。

アプトンによれば、クーシネンにも粛清の危険が迫っていたが、彼はスターリンに忠実に仕えていたこともあって、そうした個人的関係が最後の局面で彼の命を救ったのであった。さらに彼は、その言動において非常に慎重であり、不用意に自分の意見を述べることもしなかったし、フィンランド人の粛清対象者に救いの手を差し伸べることもしなかったという。

クーシネンは、1920年代にはコミンテルンの方針を作成するにあたって、大きな役割を果たしたほど共産主義理論に精通しており、イデオロギー分野でスターリンを補佐した。さらに彼は、ソ連共産党政治局のメンバーにも名を連ねた。Anthony F. Upton, *Kommunismi Suomessa*, Kirjayhtymä, 1970, ss.133-135. Pentti Virrankoski, *Suomen historia 2*, SKS, 2001, ss.852-854.